

## 最後のようで始まりの最終レポート

山岡美貴

皆さんこんにちは。OSGS プログラム前期に参加していた山岡美貴です。今回は最終レポートということで、授業内容から親善大使としての活動まで、大きく5つの項目に分けて書かせていただこうと思います。2022年1月9日に行われた成果発表会の際に、「これでOSGSプログラム参加者としての活動は本当に最後だ」と思い、なんだか寂しくなりましたが、実はこの最終レポートが残っていました。本当の本当に最後のこのレポート、プログラムの魅力が少しでも多くの方に伝わるよう想いを込めて書くので最後まで読んでいただくと幸いです。

### 項目

- 1 授業及び最終プレゼンテーション
- 2 キャンパスツアーと埼玉ツアー
- 3 埼玉親善大使として
- 4 学んだこと・今後へ向けて
- 5 参加希望者の方へ

### [授業及び最終プレゼンテーション]

前期の授業のテーマは「日米の新型コロナウイルスへの対応の違い」でした。そのため、最終プレゼンテーションでは参加者5人がそれぞれ違う分野から見た「日米新型コロナウイルスへの対応の違い」についての発表をオンラインで行いました。全9回のGreg Mott先生による講義では、日米の人々の価値観の違いや良いプレゼンテーションを行う方法を教えていただきました。ただ、講義を通じMott先生一番がおっしゃっていたように感じたのは、日米の違いやプレゼンテーション技術についてではなく、失敗を恐れず積極的に発言すること、自分の言葉で相手に伝えること、でした。発言力をつけるため、と参加したこのプログラムでしたが初めの授業ではとても緊張してあまり発言できなかったのを覚えています。

しかしMott先生がちょっとしたゲームを用意してくれていたり、失敗しても恥ずかしいと感じないような雰囲気づくりを他の参加者も含めしてくれたりしたおかげで、少しずつ発言することに抵抗がなくなりました。また、最終プレゼンテーションに向けては、フィンドレー市の市長や病院、保健所、経済開発に関わっている方々と実際にお話しする機会があり、コロナ対応に関してネット上の情報だけでなく、現地の方々の声も聞くことができました。

た。このような方々とお話はコロナ以外のことにおいても大変勉強になりました。例えば、市長の方は批判について、「批判を受けることはリーダーとしての役割の一つ」とおっしゃっていました。もちろん批判と向き合うことは重要ですが、他人から批判されるとすぐに考え過ぎてしまいがちに私に、勇気をくれた言葉でした。

このような準備段階を経て、2021年12月にフィンドレー大学の学生の方やインタビューさせていただいた方々をお招きし、最終プレゼンテーションを行いました。本番は質問にも対応する必要があり、まさに生の英語力が求められました。しかし、約5ヶ月間の講義やフィンドレーの方々へのインタビューの中で培った話す力、英語で伝える力、を生かして本番をやり切ることができました。やり切る、といふとなんだかとても苦しい想いをしたような感じですが、準備の時も、発表の時も常にワクワクが止まりませんでした。



#### [キャンパスツアーと埼玉ツアー]

プログラム期間中、フィンドレー大学の川村先生に調整していただき、学生にオンラインキャンパスツアーを行ってもらいました。現地の学生に案内してもらったため、気になったところがあれば直接質問することができましたし、見せて欲しい施設などを伝えた際にもすぐにその施設へと案内してくれました。とにかくフィンドレー大学の大きさに衝撃を受けたのを覚えています。また、ツアーをしてみるとやはり実際に行ってみたい、という思いが強くなりました。

キャンパスツアーのお返しのような形で私たち5人も埼玉県内5箇所から中継を繋ぎ、それぞれその場所を紹介しました。ここでもやはり生の英語での対話、そして紹介、ということが求められ難しい部分もありましたが、ローカルな視点で埼玉県を紹介でき、とても良い経験となりました。



[埼玉親善大使として]

プログラム期間中、私たちは埼玉県知事より埼玉親善大使に任命され様々な活動を行いました。ただ、プログラム開始直後は埼玉親善大使として行わなくてはならない活動などは特に決まっていませんでした。しかし、9月ごろに初めて授業外の時間に参加者5人でzoomをした際、「ぜひ埼玉親善大使として埼玉県の魅力を世界へ発信したい」という意見で一致し、何ができるのかを考えてみることにしました。まず、実現可能かは考えずに、とにかく埼玉県に関することを調べて、それぞれが案を出し合いました。結果、実現したのは、Instagramのアカウントの作成、埼玉県の伝統工芸品見学・農家訪問、そして埼玉県産品紹介でしたが、それ以外にも埼玉県の歌を調べたり、マスコットキャラクターを調べたりしました。

このようなことをする中で、埼玉県の新たな魅力を発見することができた上に、参加者5人の仲もどんどん深まっていきました。ただ、これらの活動を「できたらいいな」から実際に「できる」に変えてくれたのは埼玉県国際課の方々でした。ですから親善大使の活動も含めこのプログラムは、国際課の方やフィンドレーの方など、携わってくださった全員でつくったもの、という感じがします。様々な活動を通じ、国際課の方との繋がりも強くなっていきました。参加者も含め皆が熱い思いを持ちながら、しかし一方でそれぞれが違う特徴や役割を果たしており、とても良いバランスが取れていたと思います。何をするにも提案から実行までが早く、予想外のことが起きてもすぐに対処することができました。ここからは若干宣伝も含めて、私が体験させていただいた埼玉県産品紹介、クワイ農家さんへの訪問、埼玉県茶業研究所への訪問について書かせていただきます。

### 埼玉県産品紹介

今回は「ちょこたび埼玉オンラインストア」で購入できるお菓子やお煎餅などを試食し、その様子をInstagramへ投稿しました。どの商品もとても美味しかったです。試食した後の帰り道、オンラインストアをずっと眺めてしまうほど、私は埼玉県産品に魅了されてしまいました。ぜひ食レポ初挑戦で緊張しながらも嬉しそうに食べている私たちの姿をInstagramで見ただけだと嬉しいです。



### クワイ農家さん訪問

埼玉県はクワイの有名な生産地で、埼玉県で生産されたクワイは全国各地へと出荷されています。学校給食で食べたクワイの味が忘れられず、今回さいたま市にある小林さんの農家を訪問させていただきました。生産方法やクワイ生産の利点や魅力を教えていただきました。実際に生産過程を見た後に自分の手で調理したクワイは絶品でした。特に素揚げは食べやすくジャガイモよりも硬い食感でとても美味しかったです。これから、日本中、そして世界中の人々がクワイを食べる機会が増えていって欲しいです。



### 埼玉県茶業研究所訪問

埼玉県のお茶といえばやはり狭山茶です。狭山茶は「色は静岡 香りは宇治よ 味は狭山でとどめさす」と歌の一節で言われるほど美味しいお茶でその歴史もとても長いです。当日案内してくださった渡辺所長と小俣さんのお話を聞くだけでも狭山茶にかける人々の思いとその歴史の重みを感じました。実際に飲んだ狭山茶の紅茶は甘い香りがして、とても飲みやすかったです。本当に美味しかったからこそ、これからは、「埼玉県には狭山茶がある」とより一層自信を持って言える、と感じました。



### [学んだこと・今後へ向けて]

本プログラムを通じ学んだことが大きく2つあります。

まず1つ目は言うこと、やってみることの重要性です。授業内でも、親善大使の活動でも言ったからこそできたこと、やってみたからこそ学び得たものがとても多かった気がします。このようなことは口で言うのは簡単ですが実は勇気のいる行為だと思います。ただ少しの勇気でその後の結果を変えることができる、と身をもって実感したのがこのプログラムでした。また、勇気を出して行動するためのサポート体制も万全でした。人とコミュ

ニケーションをとる上で言語やバックグラウンド、社会的立場の違いを気にして何も発言しないのはとてももったいないです。ですから、失敗してもいいからとにかく挑戦してみる、という勇気をこのプログラムを通じて得た気がします。

続いて、学んだことの2つ目は、他の人々との連携です。前述した通り、このプログラムは様々な方々の協力によって進んでいきました。埼玉県国際課の方々、フィンドレー大学の方々、そして他の参加者とうまく連携し合えたことが、このプログラム成功の鍵であったと思います。今後組織として行動する場面でもぜひこの経験を生かして、周りの人々と良い関係を築いていきたいと思います。また、このプログラムで培った発信力、発言力を生かしてどのような場においても自分の意見を上手く伝え、その場をよりよくできるような、そして、どのような環境下でも自分らしくいられるような人でありたいと思います。

もちろん埼玉親善大使経験者として今後も埼玉県の魅力も発信し続けていきたいです。

#### [参加希望者の方へ]

このような素晴らしい体験をできる機会はそれほどないと思います。OSGS プログラムは年代や学歴関係なく、学ぶ意欲のある人が輝けるものです。ですから、「やりたい」と思った方は、その直感を信じてつき進んでいいと思います。私たちは1期生であり、このプログラムはまだまだ始まったばかりです。みなさんの手によってOSGSプログラムがさらに発展することを願っています。

最後に、約半年間一緒に学んできた参加者の4人、埼玉県国際課の方々、フィンドレー大学のMott先生、川村先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。このメンバーで取り組むことができ、幸せでした。冒頭にこのレポートが最後、と書きましたが、最後どころか新たな始まりにできるように、このプログラムで学んだことを生かして、これからの人生を切り開いていこうと思います。

最後は愛を込めつつ即興で作った「OSGSP (OSGS プログラム)」でお別れです。ありがとうございました。

